

みんなの力で おいしいマグロを いつまでも
発行・社団法人 責任あるまぐろ漁業推進機構

始まった自力のマグロ漁業改革

全国遠洋沖合漁業信用基金協会 富岡功理事長

刺身マグロを供給している日本の遠洋マグロ延縄漁業の経営が危機的な状態です。操業を続ければ続けるほど赤字になる船もでてきています。最近の急激な燃油高騰が追い打ちをかけました。これから日本のマグロ延縄漁業はどうなるのでしょうか。マグロ漁業の経営に詳しい全国遠洋沖合漁業信用基金協会の富岡功理事長に、経営という側面からみたマグロ延縄漁業の実態と、マグロ漁業の将来について聞いてみました。

(インタビュー・浮須雅樹)

全国遠洋沖合漁業信用基金協会とは。

富岡理事長 わたしたちの協会には、カツオマグロと大中型まき網漁業者が経営に必要な資金を借入する時、金融機関に対して負担する債務を保証する団体です。漁業者が安心して経営できるよう努力しています。

マグロ獲っても残るのは借金だけ

そうした立場で経営から見ると、いまの日本の遠洋マグロ延縄漁業の実態を教えてください。

富岡理事長 たとえば18年度のマグロ延縄漁船1隻の平均的な収支をみると、1年間に獲ったマグロを売って得られる金額、すなわち売上高は2億3000万円程度です。減価償却前の利益は1000万円弱ですが、経常利益は200万円の損失で5期連続の赤字になっています。この時で燃料油代は売上高の24%を占めていました。船を動かすために油代は必要ですからやむをえません。ただ、これはあくまでも18年度の話です。燃油が高騰している昨今はさらに状況が悪化し、売上高に油代が占める割合

は40%近くにまで達しています。マグロを売った代金の半分近くが油代で消えてしまうのです。そのほかにマグロを獲っている人の給料やエサ代など費用がかかりますから、マグロを獲ってきても儲けることはできず、借金だけが残ってしまう状況です。

当然、何億円もする船を新しくすることなどできません。日本のマグロ延縄漁船はどんどん古い船が増えてきています。マグロの価格が上がれば、まだなんとかなるかもしれないのですが、マグロの場合、市場でセリなどにかけて値段が決まるため、マグロを獲ってきた人の手では価格は決められません。油代が多くかかったからと言ってマグロを高く売ることができないため、いまのような厳しい経営になっているのです。

厳しい状況をマグロ漁業者はどうしようとしているのですか。

富岡理事長 厳しいからと言って諦めてはいけません。自分たちでなんとか油代がかからないように船を走らすスピードを落とすなど工夫し、油代にかかる費用を少しでも減らそ



うと努力を続けています。油代対策だけではありません。昨年4月には、マグロ延縄漁業の将来について話し合う「遠洋マグロ延縄漁業将来展望検討委員会」が漁業者の手で立ち上がりました。

現在、30・40歳代を中心とするマグロ漁業者32人が集まり、8つの重要課題についてチームを作って議論しています。課題は、コスト低減や販売の方法、漁法の見直し、後継者対策など、この9カ月で、のべ50回近くの協議を行っています。

海外のマグロ消費市場調査団を派遣へ

成果は上がっているのですか。

(2面につづく)

(1面からつづく)

富岡理事長 現在、検討課題を絞り、議論の段階から具体的な取り組みを開始しはじめたところです。たとえば、海外にマグロを売れないかということも検討しています。いま海外で刺身や寿司がヘルシーだということで人気が高まり、海外旅行に行かれた方は、米国やヨーロッパに寿司店などがどんどん増えていることを実感されている方も多いと思いますが、海外で刺身や寿司でマグロを食べる人が増えています。それも日本より高いお金を出して買ってもいいと。いままでマグロの刺身と言えば、ほとんどが日本で食べられていたのですが、時代も変わってきています。日本のマグロ漁業者は、日本人にマグロを食べてもらいたいという思いが強いのですが、厳しい経営が続く中で高く買ってくれる海外にも目を向けて、なんとか経営を続けていこうとしているのです。2月にはそうした海外の市場を調査するための調査団を米国とマグロの加工場があるペルーに派遣します。

もっと先の将来をみた取り組みは、

富岡理事長 中長期計画としては、地域が一体となって漁船リース法人を立ち上げることで新しい船を入手しやすくする方法はないかとか、もっと効率の良い低コスト・省エネの漁船はできないか、400トンの近い船で世界の海を巡る操業スタイルを変えるとどうなるのかなどの検討も開始しています。この答えが出るのはまだ先ですが、一步一步進めているようで、私から見れば頼もしく感じます。

厳しい経営の話や将来に向けた検討が始まったこととお話いただきましたが、富岡理事長はマグロ漁業の将来をどう見られますか。

富岡理事長 油代については漁業者の努力だけではなんともなりません。使用量を減らすことはできますが、それも限界がありますからね。油代が下がることや政策的な支援を期待するしかありません。

ただ、マグロ延縄漁業の将来を過度に悲観する必要はないと思います。たしかにいま経営は厳しいです。明るい将来の見通しが立っているわけでもありません。しかし、天然のマグロを対象とする延縄漁業は資源

に対して、とてもやさしい漁業です。効率だけみれば、150キロの長さにおよぶ縄に3000本の針をつけて、マグロがかかるのを待っているという漁業の効率は悪い。ただ、根こそぎマグロを獲ってしまうこともないし、十分に育ったマグロだけを得ることができます。いまマグロ資源が減ってしまったと言われますが、資源管理を基本としながら、世界的なマグロの需要増加に対し、安定的に良質なマグロを供給する延縄漁業は十分に残る価値のある漁業だと思います。そして重要なのは、マグロ漁業者が自らの将来について真剣な議論を始めたことです。これまではどちらかと言えば、魚を獲ることに専念するが、将来のビジョンなどについては行政や他人任せのところがありました。いまは「それではダメだ」という意識が広がり、自分たちで将来を切り開いていこうとする意識が高まっています。この意味は非常に大きいと思います。将来展望検討委員会では、議論だけで終わらせず実践に結びつけていこうとしています。私たちはそれを応援したいと思っています。

大西洋クロマグロ資源管理・試練の年

3月、東京でICCAT関係者会議開催

昨年11月、トルコで開かれた大西洋マグロ類保存国際委員会（ICCAT）で、ECが東大西洋・地中海クロマグロの漁獲枠（16,800トン）を約4,400トン超過漁獲したことが判明。米国、カナダが、モラトリアム（操業の一時停止）を提案し、紛糾しました。結局、早急に、各国の規制遵守状況をチェックし、本年11月の年次会議で、必要に応じて、現在の規制措置の見直しをすることで終了しました。

宮原正典・日本政府代表（水産庁沿岸沖合課長）は、帰国後の記者会見で、「クロマグロが獲り過ぎなのに規制が守られない状態を何もできないのは、ICCAT自体の信用にかかわる問題」とICCATの資源管理能力が厳しく問われながら、明確な答えを出し切れなかった会議と位置づけました。また、「しっかりした管理体制ができない限り、規制強化に向けて、大きく舵が切られるのではないかと今後のICCATに厳しい見通しを示しました。

なお、ICCATは、日本政府の

提案した東大西洋クロマグロ関係者会議（漁業者、蓄養業者、貿易関係者等を含む）を3月、東京で開催し、規制を遵守する措置等について協議を行うこととしています。この会議の結果が、注目されます。また、漁獲規制の遵守を確保するための措置

の一つとして、クロマグロの漁獲から市場までのすべての流通実態を一つの文書に記録し、流通の透明性を確保するための、「クロマグロ漁獲証明制度」も採択されました。本年6月から実施されることとなっています。

世界初、完全養殖クロマグロの稚魚、養殖用種苗として初出荷

近畿大学水産研究所はこのほど、同研究所大島実験場で人工孵化させ飼育していた第3世代人工孵化（完全養殖）クロマグロの稚魚1500尾を、養殖用種苗として、国内養殖業者に初出荷した。完全養殖クロマグロの稚魚が養殖用種苗として販売されたのは世界で初めて。

出荷先は、熊本県天草市で、船舶で運搬した。輸送中に稚魚が23尾死亡したものの、現地到着後順調に生育しており、現在の生存率は、出荷時の93.8%を保っている。

クロマグロの完全養殖とは、「孵化・生育・産卵・孵化」という世代交代サイクルを養殖施設内で実現するもの。今回出荷

された稚魚は完全養殖の2サイクル目として昨年7月に大島実験場で生まれた。

今回稚魚出荷に至ったことについて同研究所では「完全養殖魚の生産量が増え、外部へ出荷する尾数が確保できたこと、また輸送中や輸送先での環境変化による死亡などのリスクを軽減する技術（輸送の際、稚魚が水槽の壁に激突死することを防ぐため、壁面や照明などに予防対策を図るなど）が進んだこと」など、販売に適した条件が整った点をあげており、今後さらに稚魚の生残率を高め、コストダウンを図り、完全養殖ブランド「近大マグロ」の生産拡大を図る各種研究を推進していく方針。

泳ぐマグロを超音波でカウント

蓄養殖魚の管理の決め手として期待高まる

水産庁と水工研が実証実験

イケスで泳ぐマグロの数やサイズを超音波で正確に計測する装置が登場した。この装置は透明度の低い濁った水域や夜間を問わずに計測できる特徴を持っており、「管理が問題視されている地中海の蓄養マグロをはじめとする蓄養マグロ管理の決め手になるのでは（水産庁）と期待が寄せられている。

装置は、米国サウンドメトリック

社が開発した2周波音響カメラ「DIDSON」で、米国ではサケ遡上数計測、日本ではエチゼンクラゲの観測での活用実績がある。

DIDSONは、照射する超音波（1.1メガヘルツ、1.8メガヘルツ）で一定の範囲（水平視野角30度、垂直14度、撮影距離最大40m）にある物体を撮影できる音響カメラで、普通の光学カメラでは不可能な夜間や透明度の低い水中で泳ぐ魚を捉えられるのが大きな特徴。対象範囲を通過した魚の個体数も自動でカウントしサイズを測定でき、超音波を1.8メガヘルツにすれば約40m先までの広い範囲の魚群観測もできる。

水産庁と水工研はこうしたDIDSONの能力に着目。昨

年12月に高知県柏島で養殖マグロを生産する大洋エーアンドエフのマグロ養殖場で実証実験を実施した。

実験は、直径60cmのイケス間に横10cm、縦8cmのトンネルを作りマグロの移動の様子を観測する方式で行われた。カメラが捉えた画像を映し出すパソコン画面には、ちょうど水面を真上から見た状態が扇型に写しだされ、イケス間を高速で移動する流線型のマグロの姿を白く捉えることに成功した。パソコンに組み込まれたソフトを使うことで移動尾数もはじき出した。

瞬時にマグロのサイズを自動計算することも可能だが、今後はその指標となる基礎データの蓄積が期待されるだろう。実験に協力した大洋エーアンドエフは「透明度が低いところでも正確に魚の数を計測できるのは非常に魅力を感じる。まだ実際の養殖場で利用するには課題はあるものの、大いに期待したい」と話している。

地中海の蓄養マグロの活け込みの尾数などの不透明さが指摘されている中で、正確に計測できる装置が登場した期待は大きい。蓄養マグロ漁業を責任あるものにするためにも、装置が早期に実用化されることが期待される。



それでは、今なぜ懸案だったマグロ研究所が出来たのか？ もっとも、このマグロ研究所なるものは、水産総合研究センターのホームページ等を見ると解かるように、ネット上に出来たまぐろ類研究機動部隊のようなもので、新たな研究所の建物が実際に出来たわけではなく、資源、増殖、利用加工等の既存の水産研究所の勢力が中心になり、そのもてる力を総合的に使うというものである。もともと存在し

てしかるべき研究所であったから、その体裁にこだわる気はないし、やっと出来たかという感慨がある。なぜ今かという事を考えるとき、最近の一連のまぐろ資源管理を巡る日本の苦戦を思い起こしてほしい。その最たるものは、ミナミマグロや大西洋のクロマグロである。ミナミマグロでは豪州の蓄養の過剰漁獲疑惑は灰色に留ま

り、日本への規制強化が際立った。研究者ならずとも、何でこれだけクロマグロなどの蓄養の実績や飼育の経験がありながら、この疑惑に対して日本側が、明快な答えを出せなかったのかという事は、行政官にとってもやりきれない無い思いであったに違いない。クロマ

た。大西洋のクロマグロの資源管理の混迷を見るにつけ、太平洋のクロマグロをこのような状態にはさせてはならないという危機感とそのためは、これまでバラバラに行われてきた色々なマグロを巡る研究を一元化して行うことが不可欠という意識が高まったためマ

グロ研究所の設立となった、と私は理解している。今こそやり残した海洋牧場計画を完成するくらいの意気込みでやるなら前途は明るい。

このまぐろ研究所が持続して本来の任務を果たすのか、あるいは線香花火のように短命で消えてしまうのか、日本のみならず、世界のマグロ関係者が注目して見ていると思う。どうかこの研究所の設立が日本のマグロの研究と管理の改善のターニングポイントであったとして、後世の人から評価されるものにしてほしい。

鈴木 治郎

マグロあれこれ 科学者の目

第7回

マグロ研究所に期待するもの(下)

グロについて言えば、太平洋のクロマグロについても、WCPFCの活動が本格化し、北委員会も動き出し、真剣に資源管理のあり方を考えなければならなくなっている。かつて海洋牧場という大きな研究プロジェクトがあり、太平洋のクロマグロも遠洋水研等が中心に参画したが、残念ながら、十分な成果を上げることなく終わっ

マグロ・エッセイ

第4回天然・冷凍・さしみマグロキャンペーン 全国の消費者が反応!

責任あるまぐろ漁業推進機構（OPRT）は、昨年11月10日から2週間、全国の鮮魚小売店約1,000店で実施しました。キャンペーン中に行った、マグロ・クイズの参加者で正解者1,132人のうち、抽選で1,000人に、天然・超低温急速凍結マグロをお送りしました。また、マグロ・エッセイも募集しましたが、24編の応募の中から、兵庫県姫路市の今井一清さんをOPRT会長賞に選定。中須会長は「母の思い出とマグロに対する思いが、よく練られた文章にこめられている。日本人にとって、マグロの寿司、刺身が食べ物としてだけでなく、伝統的な日本の文化につながっていることを改めて実感させられた」と述べています。今井さんには、賞金10万円と天然・超低温急速凍結マグロ詰め合わせをお送りしました。

母とまぐろ 鮓 今井一清

私の母の、一番の好物は、マグロの握り鮓だった。私がそれを母の口から聞いたのは、60年ほど

前の秋の1日のことだった。当時中学生だった私は、姉と母の3人で稲刈り作業をしていた。野良休みのひととき、「今一番食べたいもの」が話題になった時、母は、「一番食べたい食べ物は、マグロのお鮓」と呟いた。当時は終戦直後で、酷い食糧難の時代だった。さつま芋でもカボチャでも、口に入るものがあれば幸せで、成長期の私は空腹の為、夜中に目が覚めることもしばしばであった。そんな時代だけに、野良休みの話題も、ともすれば食べ物の話となった。恥ずかしい話だが、私は、母の口から出た「マグロのお鮓」を食べたこともなければ、マグロの魚の実物を見たこともなかった。「ワサビの良く効いた・・・」と母は続けたがワサビの味も知らなかった。しかし、その時の母のうっとりした顔つきから、人を酔わせるような素晴らしい食べ物であることは、子供心にも想像ができた。

母は、生まれも育ちもチャキチャキの江戸っ子だった。戦前は、東京駅前の丸ビルの会社で英文タイピストをしており、マグロの鮓の味もその頃に、母の味覚に染みついたようだった。英語教師だった父と結婚した母は、戦後の混乱期に、父の実家の姫路市に子供達と住み、慣れない農作業と子育て、姑達の世話に苦闘する日々を送ることになった。

数年後、高校を卒業して市内の会社に就職した私は、初めての給料を手にした日、寿司屋に立ち寄り、マグロのにぎり鮓を土産に注文した。ワサビを効かしてとも言い添えた。

折詰を開けた時の母の嬉しそうな顔、一口食べてみて「ワサビが・・・」と言いながらポロリと落とした涙を、マグロの鮓を口にすると、ふと思い出すことがある。

「水産業界を盛り上げ鯛」 「漁翫」が2枚目のアルバム

フィッシュロックバンド「漁翫」が1月9日、2枚目のアルバム「FISH&PEACE」を発売した。これに合わせて森田釣竿氏が会見を行った。

森田船長は「魚と平和、海と人間をテーマにレコーディングした自信作。魚食文化をプログレッシブな姿勢で訴えていく」と強調した。

同バンドに共感し、積極的な相互協力関係をもつ責任あるまぐろ漁業推進機構（OPRT）からは、原田雄一郎専務らが会見に出席。同バンドについて、「森田氏自身が魚屋さんで、現場に密着したアピールをしている」とし、「われわれのできないメッセージの発信で、今後も協力してもらえればありがたい」などと語った。

発売されるアルバムの収録曲には「鯨」「鯛」「鮓」「鱈」「鰯」そのほかお魚販売促進特典楽曲として、「おさかな天国（おさかな甲子園○）」「森田釣竿の店頭口上」が収められている。

2月に名古屋、大阪、渋谷等でライブを予定。

▽問い合わせ先・漁翫事務所 ☎279-0002、千葉県浦安市北栄1-10-20、浦安魚市場、泉銀内

「さしみマグロ」抽選会当選結果発表

12月7日、賛助会員を対象とした恒例の「天然・冷凍さしみマグロ」抽選会を行いました。当選者は、60賛助会員。1キロの超低温急速凍結・鮮度抜群のメバチマグロを日本鯉鮓魚市場様のご協力を頂き、三崎漁港よりお送りしました。当選番号は以下のとおりです。

法人会員（6法人）

S G-1008, S G-014, S G-029, S G-038, S G-041, S G-045

個人会員（54人）

S I-014, S I-016, S I-019, S I-022, S I-024, S I-037, S I-040, S I-049, S I-056, S I-067, S I-068, S I-077, S I-084, S I-085, S I-092, S I-112, S I-123, S I-127, S I-137, S I-142, S I-143, S I-145, S I-150, S I-152, S I-157, S I-163, S I-173, S I-178, S I-192, S I-193, S I-197, S I-208, S I-213, S I-218, S I-219, S I-220, S I-228, S I-230, S I-231, S I-233, S I-237, S I-242, S I-244, S I-249, S I-251, S I-255, S I-261, S I-263, S I-276, S I-290, S I-299, S I-302, S I-309, S I-310